

Title	聖アレクシウスの妻
Sub Title	L'Epouse de Saint Alexis
Author	松原, 秀一 (Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.83- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖アレクシウスの妻

松原秀一

「聖アレクシウス伝」は仏文学史上最も古い文学作品の一つであり、その価値も又高い事は衆目の一致して認める所である。最近の中世文学の技法研究の進展はこの作品にヴェルギリウスの影響、もしくはカロリンガテン叙事詩の技法の反映を見る計りか、従来は文学的意図を見られることのなかった文書にも修辞学的構造を発見し、「ストラスブールの誓約」の中にすら修辞学的な創造を見る程であるが、その中に於ても「聖女エウラリア伝」「聖レオテガリウス伝」「クレルモン写本のキリスト受難」等の紀元千年以前の作品から、千四拾年と推定される「聖アレクシウス伝」への移行には質的な飛躍があると云えよう。この作品は、その六二五行と云う長さの点でも二四行の *Sainte Eulalie* 伝、二四〇行の *Saint Léger* 伝等それ以前の俗語の聖者伝に対して、はっきり差を示している。聖者伝は *Fortunatus* によるガリアの守護聖人 *St Martin* 伝以来、絶えまなく書かれ、九世紀に入って *martyrologes* の普及により盛んとなり殉教聖人のみならず至福者伝も含む所謂 *legenders* も作られるようになるが、この極めて早く俗語でも扱った聖アレクシウス伝は、初期の聖者伝中에서도迫害者も悪魔も拷問も超自然的奇蹟も物語らぬ点からも独特の位置を占める。但し、奇蹟の不在は中世フランス語による聖アレクシウス伝を伝える十四写本中、最も古い型を伝えている十二世紀の四写本（一つは十三世紀）に依るものであ

て、同じラテン語の典拠により乍らも、このシリヤ起源の聖人伝は時代の變遷に伴って、異同を示している。

この聖者伝を伝える中世フランス語の写本は以下の十四である。

略号 所在地整理番号 備考

- L (Lanspringe 写本) 十二世紀。現在ハノーヴァ、ヒルデスハイム聖ゴドアルド教会蔵。十七世紀にイギリスの修道僧によってランブスプリンゲン修道院に齊らされた。
- A (Ashburnham 写本) 十二世紀。アッシュバーナム卿旧蔵。現在パリ国立図書館 (N. acq. 4503)
- P (Paris, Bibliothèque Nationale. f. f. 19525) 十三世紀。旧聖ジェルマン修道院写本 1856°
- V (Vatican, Codex vat. lat. 5534) 十二世紀。1925年 Mercati によって発見された。
- S (Paris, B. N. f. f. 12471) 旧 Supplément 632 番写本。
- Ma (Paris, B. N. f. f. 1553) 十三—十四世紀脚韻 s の伝承を脚韻に改作している。
- Mb (Carlisle 写本) 十三世紀。同右
- Qa (Paris, B. N. f. f. 1555) 十五世紀初頭。十二音綴。四行単韻 (以下六写本共に)。
- Qb (Paris, B. N. f. f. 1661, anc. 7652) 十五世紀末。
- Qc (Paris, B. N. f. f. 1881, anc. 7883, 3, Delamarre 463)° 十六世紀。
- Qd (Paris, B. N. f. f. 15127, anc. supplément fr. 521) アレクシウス伝を二篇伝える。
- Qe (Besançon 図書館蔵) 十五世紀。
- Qf (Arras 図書館 766 番写本) 旧聖 Waast 修道院蔵。一四七二年に書かれたもの。
- Qp (Pannier 氏所蔵) 一四七〇—七一年に書かれたもの。

この他に Manchester 断片と呼ばれるものが John Rylands library に French 6 の整理番号で伝わっており、これは P 写本と同系列とされている。

広く校訂版で親しまれている「聖アレクシウス伝」は上記十四写本中の L. A. V. P の四写本に残るもので古くはフランスに初めて Lachmann の校訂法を伝え長く模範とされた G. Paris-Pannier の校訂から G. Paris による C. F. M. A 版、Meunier 版、Storey 版（一九四三年版と一九五八年 Blackwell's French texts 1958³）までの諸版によって広く識られている。S 写本は Paris-Pannier によって *Rédaction interpolée du XIIe siècle* と云われるもので筋にかなりの増補が見られる。二つの M 写本は半階音 (assonance) を脚韻に書き直したもので Paris-Pannier によって *Rédaction rimée du XIIIe siècle* として公刊された。七つの Q 写本は Pannier の手で校訂版が作られ一八八七年に上記の諸校訂と共に一冊本として公刊され、そこでは *Rédaction en quatrains alexandrins monorimes du XIVe siècle* と云われる。尚、十三世紀にシエノヴァの司教 Jacobus a Voragine によって書かれ、「レゲンダ・アウレア」の名で広く識られている *Legenda Sanctorum* もこの話を伝え Beauvais の *Vincenius* の *Speculum historiale* にも収録されている。これ等から又俗語で韻文の聖アレクシウス伝が書かれている。十四世紀の Le *Tombel de Chartrose* 中の八音綴で書かれた九九二行の聖アレクシウス伝はこの後者の系列のものである。

聖アレクシウス伝説が広く民衆に好まれた事はワルド派を興し異端として追求されたリヨンの商人 Pierre de Vaux (Petrus Valdis) が或日、聖アレクシウス伝が語られるのを聴いて感泣したことが、家業を捨て「リヨンの貧者」として伝導者となった契機であるとする伝承からも窺われるが、近世にもこの聖者伝が語られていた事は La Vie de St Alexis 校訂者の一人 J. M. Meunier 師も幼時の想出として記している。これ程広く親しまれ育まれたこの聖者伝は、しかし、或る偶然によって西欧に裔られ、しかも細かく見るならば、西欧には異質的な側面すら持っているように思われるので、まずこの伝説の経路を辿ってみたい。

一 伝説の西漸

この聖者伝の最古の型を伝えるのは紀元六世紀前半に書かれたと推定されるシリア語の写本であり西欧では *British Museum* に写本が三部所蔵されている。メソポタミアのエデッサの町に司教 *Rabula* (四二―四三五) の時代に住んでいた無名の聖者の伝記であつて、シリア語による八写本の比較研究をした *A. Arnaud* は恐らく実話であらうとする。その内容は次の如きものである。

「富裕に生れ富への嫌惡を貧への愛に変えた聖者の生涯を語ろう。聖者は清貧と無欲の使徒であり結婚からも色欲からも身を守り、神の爲にはアブラハムの如く喜々と家を捨てた。その完徳は言葉では云い尽せない。

聖者の両親はローマの譽れ高き家柄であつた。長く嗣子を得なかつたが神に祈り男子を得た。この世の榮譽は生れると豊かに子供に授けられたが、この空しき飾りは両親にしか意味を持たなかつた。学齡になると大勢の召使に伝ずかれ学校に通つたがこの世の空しき知識に惹かれる事はなかつた。両親は彼が神の選び給ひし具である事を覺らず、彼の愚直を悲しんだ。彼が適齡となると両親は妻を選び、町中を華燭の宴に招いたが、花嫁の到着を前に花婿は付添人を説き伏せ港に向つた。付添いに馬を託すと聖者はシリアに向う船にこっそり乗り込み、エデッサの町に着いた。ここで歿するまで彼は乞食として暮し日中は教会で祈り、日のある間は断食をし、暮方に教会の入口で僅かな喜捨を得ると祈にふけつた。必要以上の喜捨を受ける事があれば人に施した。夜は腕を十字に組み壁か柱に凭つて祈つた。一方、付添は彼の帰らぬのに不審を懷き尋ねて出奔を知り、両親も驚いて使を四方に送つて探させ、その一人はエデッサまで来て乞食の姿の聖者を見たが氣付く事はなかつた。

彼の毎夜の勤行は教会の門番の氣付く所となり門番は彼を問いつめ秘密を守る約束で彼の來歴を知つた。長い年月が経ち聖者は病み柱の間に伏していた。彼の姿が見えないので門番は怪しんで探して来て彼を施療院に入れた。彼が歿するや施療院の人は遺体を外人の共同墓地に埋葬した。これを知つた門番は司教の所に聖者の來歴を明かしに行き、話を聴いて感銘を受けた司教と墓地に向ひ墓を調べたが衣を残すのみで聖者の身体は消え失せていた」

この伝記は *Elessa* で語られ六世紀から九世紀の間にビザンチン世界に拡まっていった。この頃のギリシヤ語による伝記が四写本に遺されている。所がコンスタンティノープルには既に内容の似た *Saint Jean le Calyrite* の伝記があり、二つの聖者伝は混淆をおこすのである。*Elessa* の聖者伝に云うローマは東ローマ即ちコンスタンティノープルを指すものと思われるが、この「小屋住み」(*καλύβη*)の「聖ヨハネは西のローマの人であった。その伝説の概略は次の如くである。

「聖ヨハネはローマの貴族であった。両親が或日コンスタンティノープルからの巡礼僧に宿を貸した。この僧の質素な生活を見て感銘を受けた聖者は僧の帰国に当って同行を願ひコンスタンティノープルで修道院に入った。暫らくして父の祝福を得ずに家を出て死を迎える不孝を難じる天からの声を聴き再びローマに戻り乞食の姿で父に出会い息子と気付かれず父の家の傍に小屋を貰い受け神の信仰一筋に暮した。死を前に身分を明かしたが、この現世を願わぬ聖人の行いは崇拜的となり墓の上には教会が建てられた」

この二つの伝記はコンスタンティノープルで一つの話となりギリシヤ語で拡まり再びシリヤ語に訳されエデッサまで戻って来るのであるが、このギリシヤ語化の際に *Alexis* と両親の名が定まるのである。内容は西欧に伝わっている聖アレクシウス伝と殆等しい。

「皇帝アルカディウスとホノリウスの時ローマに *Euphemianus* と云う貴族が居て妻を *Aglæ* と云った。長く嗣子が無かったが神に祈って男子を得 *Alexis* と名付けた。適齢となり父は王の娘を選び結婚させた。式も終り二人が寝室に残されると *Alexis* は妻の許から家を出シリアに向ひ *Elessa* に留った。十七年乞食になり信心を続けたが、エデッサで信仰を蒐めている聖母像の「神の僕を探せ」のお告げから人々に求められるのを避けローマに戻り父の家に身分を知られずに住むことになった。十七年を貧者として過し歿した。その時神の声が「神の僕を求めローマの為に祈らしめよ」と命じた。探索が難行し再び神の声が *Euphemianus* の家を示したので手に遺書握って死んでいる *Alexis* が発見され、その遺書によって生涯と神への献身が知られた。両親と妻の嘆きの裡に遺体は聖ペテロ寺院に葬られた」

ここに成立した Alexius 伝は東ローマ帝国内には広く行きわたったが十世紀になるまで全くラテン世界には知られなかった。或る偶然が西欧にこれを齎らし急速に拡めることとなる。ダマスクスの大司教 *Serapio* が政敵に追われ九七七年にローマに難を避けた。時の法王 *Benedictus* 七世は聖ボニファティウス教会に彼を住まわせ、この東方の大司教の周りに僧侶が集まりその東方風の簡素で戒律の厳しい生活と信心で人目を惹くようになった。後にこの教会の修道院はハンガリー、チェコ、ポーランドへの伝道の中心となる。

この大司教とお付のギリシヤの僧侶達はローマに来てローマの人々がローマの（実際はコンスタンティノーブルの）聖人 Alexius を識らずにいるのを意外に思いローマの人々にこの聖者伝を伝え、ここにラテン語によって Alexius 伝が書かれることとなる。ラテン語による聖アレクシウス伝では聖ペテロ寺院は聖ボニファティウス寺院となり法王は *Innocentius* となり皇帝も *Honorius* と *Arcadius* とされた。この聖者伝は短時間のうちにローマに拡まり九八七年には聖アレクシウスの遺体が教会内のどこかに埋葬されるものとして修道院に寄進があった記録があり、一〇三四年一〇三五年にも修道院の守護聖人聖アレクシウスを銘記する墓碑銘が残っている。後に十三世紀に入ると聖ペテロ寺院と聖ボニファティウス教会とで聖人の遺体を廻って争いが起った。ギリシヤ伝本によって聖ペテロ寺院は聖アレクシウスは聖ペテロ寺院に眠ると主張したのであった。 *Euphemianus* の家も発見され今に伝わる程である。

フランス語訳は一〇四〇年と推定されるがこれは大司教のローマ到着の九七七年から僅か六〇年程後であり伝播は極めて早いと云わねを得ない。

二 伝説の変質

聖アレクシウス伝の各々の伝承は多くの異同を示し、その全体を扱うことは至難である。ラテン語文を基とした十一世紀のフランス語によるものもその原型と多くの差を示し、特に *descriptio* に於て著るしいがこの技法の問題は他日に譲ってここでは西欧化の面を取上げたい。この伝説に超自然的奇蹟が語られず悪魔も登場しないことは前にも述べたが、他の特徴として聖 Alexius の性格があげられよう。実際この聖者は東方的聖者であって伝説の変化はこれを西欧の聴者に受容させようとする所からおこるとまで云いうる程であ

る。シリアの伝承では聖者は学業に関心を示さず両親を心配させる程であった。Amiaud の伝記に依れば “ non seulement il ne faisait nulle attention à ces choses passagères qui s'évanouissent, c'était même à l'opposé qu'allait ses visées, en sorte qu'il s'accoutumait à l'humilité, tout en se consacrant en paix à l'étude ; et bien que beaucoup d'enfants de son âge cherchassent à le faire fatiguer dans sa poursuite opiniâtre d'une grande science, il ne se départait pas de sa persévérance. Or les parents de l'enfant, ne comprenant pas qu'il était un instrument choisi par Dieu, se prirent à s'affliger et à se lamenter, à la pensée qu'il était simple et inhabile à la vie de ce monde.” と云う。東方の修道生活と西方の修道生活を区別する特徴はこの「学問」に対する態度であつて、この “ Primat des Simples ” は東方的なものである。西欧の修道制度は東方からの輸入であるが東方の孤独の苦行よりも研学に重きを置いてゐる。聖アウグスティヌスは三九六年ヒッポに修道院を開き、北アフリカに修道制度を斉らしたがその Reglae は図書室の存在を前提としてゐる。モンテ・カシーノ修道院規定には四旬節までと四旬節間の読書を規定して A kalendis autem Octobris usque caput Quadragesimae, usque in horam secundam plenam lectioni vacent ; (...) Post refectionem autem vacent lectionibus suis aut psalmis. (...) In quibus diebus Quadragesimae accipiant omnes singulos codices de bibliotheca quos perordinem ex integro legant ; qui codices in caput Quadragesimae dandi sunt. 一定の日曜の研考に用ひられる Dominico item die lectioni vacent omnes, 筆記具は修道僧に当然とせられる物であつた。Dentur ab abbate omnia quae sunt necessaria : id est, (...) cultellus, graphium, tabulae (...) シリアの伝記では神の愛を「まろか昔」であつた聖者はラテン語では et ita Deo largiente edoctus est, ut in omnibus philosophiae et maxime spiritualibus foret studiis と賢くかなりのラテン語をこれに從つて Tant aprist lettres que bien en fut garnit (I. 34) といふ写本もこれと等しいが M 写本 (十三世紀押韻詩) になると敷衍され、学芸 (artes) を修めた秀でた智力の人となる。

56 Puis si le fissent a l'escole mener,

Et l'escriture enseigner et mostrer.

En poi de tens sot bien lire et canter,

Et en latin mont sagement parler,

60 Et une loi gentement visiter.

Et kant hi enfes fut des ars bien senés,

De mout ciers dras s'est ricement parés :

Droit a le cort le roi en est alés.

シリヤの伝記では聖 Alexis は自分の妻の来る前に家を捨てるがラテン語と西欧の伝記では主に於て結ばれ妻に伝道し指輪と劍の束を身へて家を後にして行く。"coepit nobilissimus juvenis et in Christo sapientissimus instruere sponsam suam et plura ei sacramenta disserere, deinde tradidit ei annulum suum aureum et rendam, (...) dixitque ei "Suscipe haec et conserva, usque dum Domino placuerit, et Dominus sit inter nos. 家出後のエリヤの夜間の苦行は姿を消し、単に permansit in sancta conversatione et vitae austeritate per decem et septem annos incognitus. とのみ記される。

聖 Alexis はローマに戻り父と対面し乍ら氣付かれず母、妻の姿も見て十七年を暮すが心を動かされない。これは神に全身全霊を捧げた姿で impassibilité を聖人の目標とするものであろう。この考へはギリシヤ語伝本にもラテン語の伝記にもないが、フランス語の H. L. V. 写本には言明してある。

241 Soventes feiz lur veit grant duel mener

E de lur oitz mult tendrement plurer,

E tut pur lui, unces nient pur eil.

Danz Alezis le met el consirrer ;

245 Ne l'en est rien, sist a Deu aturnet.

同じ写本で母は息子の遺体を前に無情さを責めて嘆く。

E de ta medra que n'aveies mercit ?

Purquen vedeies desirrer a murir,

440 Co'st grant merveille que pietet ne t'en prist.

.....

446 Filz Alexis, mult ois dur curage,

Cum avilas tut tun gentil linage !

Set a mei sole vels une feiz parlasses,

Ta lasse medre, si la (re)confortasses,

450 Ki si'st dolente. Cher fiz, bor i alasses !

S 写本ではローマの道路上の再会には母も父と俱にあることになるが、
両親の悲歎の様を見て聖 Alexis は心を動かされる。そして
それを表わすまいと努力したのである。

Com il les voit plourer si tenremant,

748 Iriés en est, mais il n'en fait samblant,

Orient et redoute ne l'voisent ravissant.

De tout a mis en Jesu son talent.

M 写本では聖 Alexis は父に自分を気付かれぬようにギリシヤ語で話しかけようと考える。

Or se commenche li ber a porpenser

620 K'a Rome ira sen^vpère araisonr

Et en₁grigois in tel^vwise parler

K'a sen romanc nel pora aviser,

両親の悲歎を見て心を動かされまいと同じく努力をする。

Kant il les vit si aler sospirant,

Iriés en est, mais n'en fait nul semblant,

Car il cremit k'il ne le conoissant :

730 De tot en tot a Diu sen talant.

“Jesu, dist il, ki mains en Oriant,

Kes amistiés est de mère a enfant !

Chis très grans dues k'il vont por moi menant

734 Or m'est ligiers, si l'troverai pesant :

Au grant juisse me revenra devant.

Ajue, Dius, con en sont desirant !

S'or me voioie faire a iaus conoissant,

738 Tel goie aroient onkes n'orent si grant.”

の写本では聖マレクシウスが肉親の姿を目にして感動する項は L. H. V と同じく

772 N'a soig que l'voie si est a Diu tornés

であるが、この後で父、母、妻と直接対話をするように筋が変わり M、Q の伝承もそれを受継ぐ。M 写本では両親と妻を見て衝撃をうける。

Il les eswarde, et si s'en fait si mut

Ke s'on l'avoit a un grant pel batut :

780 A Diu se tient par itele viertert

Ke lui ne caut de parent ne de drut.

神への信仰びそねを業の種へののびある。母はこの罪業や罰十 Alexis と云ふるを氣に和語やことばをへ。

S (v. 852-855)

M. (v. 871-873)

Quant je l'egart, membre moi de mon fil ;

Pour un petit ne l'resemble del vis.

Lors plour des oels, ne m'en puis astenir :

Çou est li deis dont m'estora morir."

母の心を断るいと (Chétien と云ふるを業へた) Alexis と母の目を抱を神の心や許さ。

S (v. 871-882)

M. (v. 877-896)

Il s'abaissa ; as piés se li cai ;

Puis le baisa, se li cria merci.

"Sire", dist ele, "Quel pardon m'avés quis ?"

"Sire", dist ele "quel pardon me querés ?"

"Pour mon malaige quic jou estre encombrés."

"Sire", dist ele, "tout vous soit pardonnés."

Li dues de li m'ochira ains mes dis."

Tant s'esforcha ke le piet li a pris,

Si li cria mierchit li Diu amis.

"Sire, dist ele" de col m'ales proiant ?

"Ma biele dame, jou l'ferai entendant :

Kant jou premiers vinc en te cort errant,

Si te proiai l'hostel por Diu le grant

Et por l'amor Alexis ten enfant :

Ainc puis chel di n'eus le cuer goiant,

Ne ne venis par devant moi passant

Se me veisses n'en alasses plorant.

Dou ruieste duel ke vois ramentevant

Meffais en sui, jou l'sai a eschant.

Pries est me fins, car mout vois agrevant ;

Si l'une pardone por l'amor Diu le grant."

Tant a li sire et proiet et plorat

Et la pucele les a bien esgardés,

Se li pardonne, ele fait autretel.

K'eles li ont werpit et pardonet
Ire et descorde et male volentet.

Ele s'en tourne, cil est mout liés remés.

Atant s'en torment, ke n'i ont plus parler.
Et il remest tos sos sos le degret.

Iluec converse issi dis et set ans.

Dis et siet ans i a si convierset.

Impossible であつた聖者は肉親を前に涙を流すやうに変身する。S 写本に残っている母の Com n'eus enhate! (v. 1198) と云ふ息子の非情さへの恨みは M・Q 写本群には現われない。時代と共に大きく浮かび上つて来るのは、十一世紀伝本では聖者との対話は記されず出奔伝の嘆きと遺体の前での嘆きの言葉のみが、それも六二五行中で二八行しか記されていない置去られた妻の姿である。

III Lesigne

フランス語にちかぶ理 Alexis は母 Aglae の名ゆゑ妻の名も明かぢぬが、ただの写本のみか La pucele iert de moult grant parenté
 Fille a un conte de Rome la cité; Lesigne ot non, ses pères Signourés; (v. 89-91. cf. 839) と妻の名も妻の父の名も伝へず。但しの
 写本は母 Aglae を Fille Flourent, o non Boine Eurée (v. 56) と變えてゐるので Lesigne の名も聞かぬ。十一世紀の伝本
 では結婚の夜聖者の決心に無言の妻の言葉としては夫の出走後、悲嘆の母に対して(v. 148-150)と聖者の遺体の前での嘆き(v. 468-495)
 と二八行の言葉を伝えるのみだが、S 写本と M 写本では家出をとめやうと自分を見捨てなうやうと

S (v. 166-173)

M (141-147)

Dist la pucele : " Or sui molt esgarée;

Dist li puchiele : " Or sui mont eswarée;

Mainte me la dunt tu m'as amenée.

La m'en reporte dont tu m'as apportée.

Pr coi me lais ? Ja m'as tu esposée.

Por coi me lais kant tu m'as esposée ?

Que querras ore en estrange contrée ?

Ke querras ore en estrange contrée ?

Que porai dire ton père ne ta mère ?

Sempres m'aront de lor terre jetée.

Demain serai de te cambre jetée,

Puis m'en irai com autre asoigmentée.

Puis m'en irai comme femme eswarée :

Tel honte arai jamais n'iere honorée."

Tel honte arai jamais n'ierc honoré."

と譯す。謂 Alexis の決心は固く言葉や戻して欲得く、妻は返して難い。

S (207-209)

M (302-310)

Ot le la bele, ne cesse de plorer :

Ot le li biele, si laissa le plorer.

“France Puchiele, por l'amor Diu, Mierchit !

Lai nient aler, car tuit sont endormit.”

“Sire,” fait ele, “or te command a Dé

“Va t'ent a Diu,” li biele respondit :

“Chius ert dolens ki toi engenuit,

Si iert li mère ki soef te norri

Et jou meisme ki l'avoie a marit ;

Or verrai plait a grant duel partir.

Quant autrement ne te puis retourner.”

Or t'en va, sire kant ne te puis tenir.

聖者は悦び折半した指輪を一年以内に送らなから受取つても自分が戻らなかつたら他に嫁すまいと伝へる。妻はこれ程に疎まれたかゝる。De cest anel que jou ai departi Ceste moitié qu'en aumonière ai ci, Dui en un an le renvoyerai ci Par un messaige u moi se jou sui vis. Se ne revienng, puis pues prendre mari ; Savoir porras que alés sui a fin. ” Ot le la bele ; si a jeté un cri : Quidé sa mère que il juast a li. “Bele,” dist il, “vous me volés honnir.” Par Diu ”, dist ele, “ aîs de moi merci. ” “Sire ”, dist ele, “ moult ai mon cuer mari ; Se moi en poise pour coi me as plus vil ? ” “ Certes nen ai ”, çou dit sains Alessis, “ Ains vous aim plus que riens que Dius fesist, (...) ” (S 写本 vv. 215-228)

妻と聖者の間には対話が成立してゐる。対話は三二八行まで続き、妻は父母の嘆きを想ひませ帰國の日を尋ね同行を懇願する。

S (vv. 307-315)

M (311-319)

S'a ten conseil le peusse trouver,

S'en ten conseil le pooie trover

Qu'ensamble toi me laissasses, aler,

Ja me verroies gentement conneer,

Tondre mes crins, un capel atubler,

Et prendre escerpe et un bordon ferré ;

Servirai toi de tes dras relaver,

Ne ja luxure ne m'verras demener,

Ne adultère, ne autre putée."

" Non ferai, bele, ains te commandant a Dé,

K'ensamble od toi m'en laissasses aler,

Ja me verroies gentement apriester,

Tondre mes crins et wimplés atubler,

Et prendre eskerpe et bordon acater :

Toi siervirai de tes dras relaver,

En se ke ja ne te quier adeser

Ne carnelment dalés toi convieser."

" Non ferai, biele, Jesus te puist sauver !

Ains te comant a le virgene Marie,

Ke des diables te port tel warandie

Ke mais ne puisses iestre par laus honte."

Le gloriours qui pour fu penés

En sainte crois, pour son pule sauver."

Q (v. 126-136)

" Sire, dit la pucele, car me lessiez aller :

S'il vous plect, avec vous vourray mon cors lasser,

Ne ja ne quer a vous charnelment adezer.

Tondre ferray mes tresses, sire, s'il vous est bon :

Pour vostre amour prenray l'escherpe et le bordon :

Vos dras vous laveray quant en sera session.

Alexis respondi doucement a bas son :

“ Ma suer, vous demourrez pour vostre onneur garder :

Je vorai la penance pour nous deus endurer.

Jhesu Crist vous doit grace de vostre ame sauver.”

十一世紀写本では二八行が記されるのみであった *Lesigne* は、S 写本以後は主役の一人となる。シリア語写本では結婚式を挙げる前に家出をした聖者はラテン語の伝記では聖ボニファティウス寺院で神の前に結ばれているのである。 *Impositae sunt eis singlae coronae in templo sancti Bonifacii martyris per manus honoratissimorum sacerdotum et sic cum gaudio et laetitia laetum duxerunt diem.* 結婚は秘跡の一つであって勿論それ自身罪ではなく、又神の前に結ばれた *Sacramentum* は人がそれを解くことは許されなから。指輪はそれを象徴している。十一世紀写本では剣の束と共に妻に渡された指輪は (Pois li cumandet les renges s'espethe Et un anel. v. 72-3) 十二世紀の S 写本では剣で半分に断たれ妻に一半が与えられ (Prist un anel dont il l'ot espousee, Dous pars en fist al trencant de l'espee : L'une partie l'en a recommandee, Se li pria que'ele soit bien garde'e ; S'on li demande, k'ele soit aprestee : Ensemble lui en a l'autre portee, Que se jamais revient a sa contrée Et il li mostre les enseignes prouve'es, Que'l reconnoisse entre li et sa mere. (S. 157 ~ 164) 他日の証拠とされる。聖人は遺書の中この指輪の一半を封じておくべきである。

S (v. 1133-1139)

M (v. 1138-1143)

Et la moitié de l'anel ont trouvée,

Et le moittet de l'aniel ont trovée

Dedans la cartre très bien envolpee'e,

Ens en le cartre très bien envolpee'e,

Dont la moitié li ot recommandee.

Dont le moittet li ot recommandee ;

Ele l'ot bien estoie et garde'e ;

II (Pape) li demande : ele l'a aprestée :

On li demande, ele l'a apportée :

II les assemble, si se sont accordées.

L'une part a l'autre rajostée

Dist l'apostolies : "Cest ensegne est prouvée."

Et nostre sire l'a très bien rasoudée.

Q (v. 695-701)

Quant departi de lie son anel li coupa :

Verz en ci la moitié !" La pucele cria

Quant ces moz entendi : "Lasse ! mal eürée !

J'ay bien l'autre moitié trente et quatre ans gardée."

Mout dolente l'ataint. Tel vertu la journée

Fist Dieu que l'une pieche est a l'autre soudée,

Si bien qu'il n'i parut c'onques fust departis.

M' *Q* 写本群ではこのように指輪は奇蹟を起し合むや田は接合のさむからなむなりといふ。聖者の父は遺体の手にていふ遺書を手にていふこと取の事が出来なむ。Euphemianus autem (...) inventit eum iam defunctum (...) habebatque in manu brevem scripturam et voluit eam ab eo accipere et non valuit. 聖者に遺書は所ていふや手にていふや出来ぬ (L. H. V 写本第七一節一七五節)。十一世紀の写本では妻は聖者の歸終に立合ふ語やない。

S (v. 980-996)

M (v. 1016-1022)

Ja iert en transe quant la pucele vint.

Et li espose cuert a saint Alexis :

Adont l'esgarde, si le vit empailir.

"Sire", dist ele, "mout vous torble li vis"

"Sire, fait ele, "mout vos torble li vis."

“ Bele ”, dist il, “ car près sui de ma fin.

Grand paour ai, car près sui de morir.

Car or voi çou que onques mais ne vi :

Voi quantes mains me voelent recuellir :

Hui perirai se Dius ne me garist.

Pense del cors qu'il soit ensevelis ;

L'ame ara çou que ele a deservi.”

Il li a dit : “ Pour amour Diu, pucele,

Ma fin aproce, ne viverai mais gaires.

Sains Bonifaces, que on martire apele,

Porter m'i fai, se m'i fai metre en tere ;

Quant tu morras tu i vauroies estre.”

“ Au congié Diu, sire ” dist la pucele.

“ Chiertes, puchiele, or m'aproce me fins.

Grant paor ai por çou, le te plevis :

Vois ke chi a de ches noirs anemis ;

Dolent che lui ki en lor mains ert mis !

Diu en ai jou de mes dos piés requis.

聖者はエルサレム巡礼より持帰った *palmes* を墓に植えることを頼み、来歴を問い尋す妻に答える事なく息を引取ってしまう。S写本では死を父に告げるのは従者であるがM写本では聖者の死を告げに赴くのは妻である。聖者の遺言についても同様に変化が認められる。遺書はS写本からは妻に宛てられるのであって、神に祈って法王が手紙を手にとると手紙は妻の胸に舞い込むので法王は自分が神

と懽ふべしと云ふに堪へぬ。 Li apostolies mist sa main a la cartre ; Sains Alessins la soie li alasque, Cil le reçut ki ert de Rome pape : Quant il le tint si le moustra as autres. Iluec fist Dieus un gloriosus miracle, Que de sa main s'en ala droit la cartre : A la pucele s'en ala a la place, Ens en son sain en son biant de paille : Emprés sa car ot vestue la haire, Doucement sert le gloriosus mirabile ; Ele ne vent c'om ne fême ne l'sace ; Sains Innocens esperdi son coraige ; Si ot vergoigne des hommes de la place. Et paour a ke Damedius ne l'hace. Sains Innocens quant ot la cartre overte Et vit les lettres que li sains hom ot fêtes, Ains li escarpe que le peust espialre : Tout droit en va el sain de la pucele, Sous son biant, entre ses deux mameles, U ele pleure mais et les soutraies Que li sains hom sour le degré a traies. Ne si ne sati c'a lui eust ataire Mais perdre en crient le gloriosus celeste. (...) 法皇は眞書を、Lesigne と原ひふたひと云ふ事を驚かされしに云へ。 蘇我姓子の深書讀トハ、トロンハトト手紙を驚か。 Ele regarda les clers de la contrée. A saint Ambroise a la cartre livrée. Cil ert evesque et canceliers saint Père. Il list la letre ; li autre l'escoutérent. Le non lor dist del père et de la mère, Et ce celi que il ot espousée Et si lor dist de ques parens il ére : Et la moitié de l'anel ont trouvée Dedens la cartre très bien envolpée, (...) “Sire”, dist ele, “que l'm'avisés tant celée ? Si les eusse rendues et moustrees.” Grans fu li diex, a terre ciet pasmée. M'ウコはや々簡略と同じ筋を演ぶ。ウコの伝承は次の如くである。

Dezploier la cuida et vout lire sa vie :

660 Mez le dous Jhesu Crist ne le consenti mie,

Car des mains l'apostole la laitire s'en yssy,

Ou sain a la pucele par devant tous saly

Qui trente er quatre ans out atendu son mary.

664 Tous ceus qui la estoient en furent esbahy.

Mez le dous Jhesu Crist le fist pour enseigner

Cordre de mariage fait formant a prizer,

Quant desus l'epousee fist la lestre lancier,

668 Sus père ne sus mère ne la vout envoier.

Persone est bien cheitive qui ront son mariage :

Dez lors renie Dieu et se met en l'homage

Des anemis d'enfer qui tant sont plains de rage.

S 写本以来、妻の胸に遺書が舞い込むこの奇蹟こそは、父母よりも人は妻と緊く結ばれている事を示すとされるのである。神の前に聖 Alexis と結ばれた妻は三十四年の貞節夫に捧げ臨終に際して語を交すことが出来、聖地からの棕櫚を墓に植えることを頼まれ、遺書を受ける特権に恵まれるのであり、夫に去られた妻ではなく、常に夫の信頼を託された妻なのである。僧侶の célibat を定める一方、結婚を神の創造に加わる人間の行為とし秘蹟として認めるカトリックに於ては、教会で結ばれた Alexis と Lesigne の関係のこの変化は必然的と云えよう。又、一方には十一世紀から十三世紀の間に女性の進展があつたことも考慮しなければならない。

La belle Aude n'apparaît dans le *Chanson de Roland* que pour mourir aussitôt de chagrin, aux pieds de Charlemagne (P. Le Gentil) と云われた「ロランの歌」の Alde と写本 V₄ とは Vienne の Girard と馬にのつて対話をし乍ら Blaye までロランと兄オリヴィエに対面に来て二人の死を知り、ベタニヤのラザロを甦えらせ給ひし神に祈り、天使をしてオリヴィエの口から語らしめる。Li veras Deo sa polcella no oblie, Char li santi angles à sa voz estaudie : Oliver parloie si cum il fust vie : (V₄, v. 5326-5328) その後、世悔僧に告白してから死ぬのべあり Belle とのみ云はれてゐた Aude を十三世紀末のバリ写本は描写して Mout fu bele Aude quant el fu conraee Tres grans chartez li est el vis montée; Soz ciel n'a rose qui tant soit colorée, Qui sa blanche n'ait toute trespassée (P. v. 5580-5584) と云ふロランの遺体の前での Aude の plainte も長く続けられるように変ひ。武勳詩でも聖者伝でも女性は十一世紀を過ぎると陰の人物ではなくなつて来るが Lesigne はラテン語祖本の枠組と夫が聖者であると言う制約によつて、かえつて女性の

役割の変遷をなにより表現してらるゝと想われるのである。

使用した参事文書

- Gaston Paris & Léopold Pannier : *La Vie de Saint Alexis*. Paris 1872
J. M. Meunier : *La Vie de Saint Alexis*. Paris 1933
A. Amiaud : *La Légende Syriaque de St. Alexis. l'homme de Dieu*. Paris 1889
G. Rohlf's : *Sankt Alexius*. (Sammlung romanischer Übungstexte) Tübingen 1958³
C. Storey : *La Vie de Saint Alexis* (Blackwell's French Texts) Oxford 1958
Walberg : *Contes Pieux en vers du XIV^e siècle tirés du Recueil intitulé Lé Le Tombeil de Chartrose*, Lund 1946
Raphael Walzer : *Regula Sancti P. Benedicti*. Beuron 1929
Henri I, Marrou : *Histoire de l' Education dans l'Antiquité*. Paris 1965⁴
譯 Alexis 伝の引用はラテン語は Rohlf's 版³ フランス語は Paris-Pannier 版²が、十一世紀 (L. A. V 写本) のフランス語
のものは Storey の Blackwell's 版³がよい。Chanson de Roland の引用は V 4 頁 G. G. Quierazza : *La Chanson de Roland nel testo
assonanzato franco-italiano*, Torino 1952, P 43 R. Mortier : *Le Texte de Paris* 1947 にある。